

国際協力特別賞

出来ることから始めよう

立命館守山中学校 2年

猪野 日向

「これはもう食べないの？」

突然知らない人に食べかけのハンバーガーを指さされた。ぼくは「ノー」と答えた。すると食べ物が欲しかった裸足のその人は去って行った。これはぼくが実際にファストフード店で経験したことだ。

ぼくは中国に2年間住んでいた。そこでは裕福な家庭に育ち、毎日外国車で送り迎えをしてもらい学校へ行っている子どももいれば、学校へも行けず道路で空き缶を持ちながらお金をもらっている子どももいた。中国では一人っ子政策のため、戸籍がない子どももたくさんいる。そんな子どもは教育すら受けられないのだ。

ぼくの通っていたインターナショナルスクールは、年に一度のクリスマスに、施設で生活してる子どもたちのために、子どもの名前や性別、年齢、服や靴のサイズが書かれたバッグにプレゼントを入れて送る。そんな活動をしていた。ぼくもおもちゃを買ったり、机にあった未使用の文房具などを準備して送った。その後、ぼくの買ったおもちゃや文房具を嬉しそうに抱えている写真がお礼のメッセージとともに送られてきた。なんだかぼくは罪悪感を覚えた。それはプレゼントを選ぶ時に何も考えずに買ったり、机にあった使わないものを入れて送ったからだ。何が必要かなんて考えずに。次の年は、バッグに書かれている情報を見て、ぼくと同じぐらいの年齢で同じぐらいの身長だとか、ぼくはサッカーが好きだけど、この子も好きかな？とか考えながらシューズやスポーツブランドの文房具など気持ちの込もったプレゼントが送れた。その後、写真とお礼のメッセージが送られてきた。前の年とは違って、写真の笑顔を見て嬉しかった。ぼくが一生懸命選んだものを大事に使ってくれている。そう思えたからだ。

ぼくが普段、不自由なく使っている文房具や当たり前のようにある服や靴、学校、そんな当たり前のことが当たり前でない子どもが世界にはたくさんいる。そんな子どもたちのために、ぼくにも出来ることから少しずつついでいきたい。そんな気持ちにさせてくれたインターナショナルスクールでの活動に感謝したい。そして、当たり前の生活をさせてくれている今に感謝しなければならない。施設にさえ入れない子どもも世界にはたくさんいるし、教育だけではなく病院にすらいけない子どももたくさんいる。そんな子どもたちのために、

少しでも募金したり、古着をワクチンに変える活動に参加したり、誰にでも出来る活動はたくさんあると思う。ぼくはぼくの出来ることを少しずつだけどしていきたい。これからの未来のために、すべての子どもの教育のために。